

厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
心身症、神経症等の実態把握及び対策に関する研究
分担研究報告書

分担研究 心身症、神経症等の実態把握に関する研究(分担研究者 奥野晃正、衛藤 隆)

1-B 学校を対象とした心身症、神経症等の全国一斉調査結果に関する一考察

研究協力者 市木美知子 京都市教育委員会 指導主事

今回の全国学校調査の結果では、保健室を利用する理由として「頭痛」「だるい」「腹痛」が上位を占めていた。これはほとんどの学校で見られる傾向であるが、表面に出ている症状から理由を探ることが大切である。しばらく時間をとって話すことにより、思いがけない子どもの心の内面を知ることができる。保健室における相談活動を充実していくうえで、養護教諭のヘルスカウンセリング能力と力量を高めるために研修を広めているところである。すなわち、自律神経による心身症状のメカニズムを理解したうえで、起こってきた症状が、いろいろなストレスの中で攻撃欲求の抑圧から出ているのか、依存欲求の抑圧から出ているのかを判断し、子どもたちを支援することが大切である。訴えてくる症状の初期に、養護教諭は、まず、除外診断のための手だてを行わなければならない。経過を見る中で、必要に応じて保護者に連絡をとり、医療機関への受診を勧めるようにしている。

調査結果から、心理的な要因による保健室来室が、延べ利用人数61,496人中6,100人(9.9%)であり、中学生になるとこの割合が12.6%と高くなっていた。訴えてくる症状をみると、年齢の低い小学生で頻度が高い心理的症状として、腹痛(依存欲求)、頭痛(攻撃欲求)、嘔気・嘔吐(依存欲求)、胸がドキドキする(攻撃欲求)等があり、症状が進む中で、微熱や胸が苦しい等の症状に発展していく例が多いと推察された。

次に保健室の利用回数を検討してみると、「来室回数が1回」が30,429人であったが、心理的要因による来室者では、この来室回数が多くなったり、来室する曜日や授業科目・時間帯が一定したりする傾向が出てくる。この傾向を分析することが、心理的要因を判断するうえで大きなカギとなるだろう。平成9年に行われた「保健室利用に関する調査」報告書(財団法人日本学校保健会)によると、「養護教諭から

みた来室理由の背景」と「児童生徒の来室理由」との関連の項目で、「摂食障害」「いじめ」「心身症」「性に関する問題」「情緒不安定」「家庭環境」が関連していると思われる場合の児童生徒の症状について次のようにまとめている。

(1)「摂食障害」が関連していると判断した児童生徒の来室理由では、「体調が悪い、痛む、苦しい」が小学校で28.7%、中学校57.1%、高等学校51.6%で最も多かった。

(2)「いじめ」が関連している児童生徒が来室する理由は、「体調が悪い、痛む、苦しい」が小学校で30.5%、中学校37.4%、高等学校34.3%だった。次いで多かった理由は、小学校では「仲間や先生とおしゃべりができない」が23.7%、中学校では「なんとなく」が15.9%、高等学校では「困ったことがあるので聞いて欲しい」が16.2%だった。

(3)「心身症」が関連していると判断した児童生徒の来室理由は、「体調が悪い、痛む、苦しい」が小学校で48.3%、中学校で67.9%、高等学校で53.3%と最も多かった。

(4)「性に関する問題」が関連している時の来室理由では、小学校では「困ったことがあるので聞いて欲しい」が45.0%と最も多かった。中学校、高等学校では、「体調が悪い、痛む、苦しい」が最も多く、中学校では23.2%、高等学校では35.9%だった。

(5)「情緒不安定」が関連している時の来室理由は、小・中学校、高等学校とも「体調が悪い、痛む、苦しい」が最も多く、小学校では37.8%、中学校では42.1%、高等学校では42.7%だった。

(6)家庭環境に問題がある場合の来室理由は、「体調が悪い、痛む、苦しい」が多く、小学校で33.2%、中学校で42.5%、高等学校で42.6%だった。

この「体調が悪い、痛む、苦しい」の中に、今回の全国調査の「だるい、頭痛、腹痛」などの身体症状が含まれていると考えられる。これらの個々の症

状に関して、ヘルスカウンセリングの観点から、関係機関の連携はもとより、学校として最も身近にいて下さる学校医のご理解と適切なお指導を切に願うところである。